令和6年度　東京都立瑞穂農芸高等学校（全日制）学校経営報告

校長　大畑　哲也

今年度は前の教育課程に戻り、体育祭や瑞高祭は従前の形式を参考に生徒や地域の実情に即した形式で実施した。日常の学習活動から大きな行事、また地域との連携に至るまで、全教職員による組織的な取組を推進してきた。今年度の結果を検証し、次年度へ反映させ学校全体で取り組んでいく。

１　今年度の取組と自己評価

（１）教育活動への取組と自己評価

各学科の教育活動

①大学科共通	（ア）	授業規律の確立に重点的に取り組み、教職員が共通認識をもって指導にあたるように努めた。学級担任と教科担当が連携することで、生徒一人一人の学習規律の確立について指導にあたった。
	（イ）	各教科は、教科主任を中心に「学力スタンダード」の活用と観点別学習評価の精査及び改善を通じて、生徒の基礎学力の定着と伸長を図るとともに、学力の向上に取り組んだ。
	（ウ）	基礎・基本の学力を確かなものにするため、１年次には中学校段階の再学習を実施した。特に、国語・数学・英語を中心に、小テストを繰り返し補習・補講等を実施した。また、全学年にわたり全教科で、高校の学習に遅れがちな生徒に対して、補習・補講・レポート提出などを実施した。さらに複数教科で校内寺子屋事業（学力向上）を考査前に活用するとともに、長期休業中に講習を実施した。
	（エ）	教職員は、学習指導力向上のために研究と修養に努め、授業力の質的向上に取り組んだ。そのために「教員相互の授業参観」を実施するとともに、研究授業や他校における指導教諭の授業参観を通して実力を高めた。また各教科担当者とデジタルサポーターとの連携を深め、ＩＣＴ機器の活用を充実させ、オンラインで活用できる教材開発を積極的に行った。
	（オ）	「英語」や「数学」での習熟度別授業、「体育」や「家庭」等の少人数制授業を有効に活用し、生徒の実態に即した授業を展開した。
	（カ）	特別な支援が必要な生徒について特別支援相談委員会や企画調整会議等で生徒情報を共有し、組織的に対応した。

農業科、家庭科の取組

②畜産科学科	**（ア）学科における学習指導・生活指導・進路指導などの取組**
	（学習指導）専門教科で丁寧なレポート添削を行い、文章力や表現力の向上につなげた。 （生活指導）すべての授業において、挨拶、遅刻、頭髪、身だしなみの指導を徹底した。 （進路指導）進路指導部と連携し、学科の教員による面接指導と小論文・作文指導を丁寧に実施した。 （地域連携）多摩地区の酒造会社や飲食店のほか、都内の製麺業社との連携を図り、家畜の肥育から出荷の流れを体系的に学ぶ環境を整えた。また、本校で開発したレトルトカレーを瑞穂町のふるさと納税返礼品として提供した。地域の行事への参加を再開するとともに、多摩地区の小中学校での食育にも取り組み、地元企業・自治体との連携が充実した。 （特色化）地域の活性化や産業の発展に貢献できる課題研究の取組が実践できた。また高大連携を実質的に再開し、授業内容の充実と研究発表に取り組むことができた。
	（イ）目標達成のための実践結果
	（A）土日の管理について、生徒の１日の参加を実施し、生徒が飼育管理を通して責任感や協調性を養うとともに、自己の役割を認識し、自信をもって活躍できる教育活動を実践することができた。 （B）公開講座、施設公開、学校間協力、地域行事等を再開するとともに、ＳＮＳや学校ホームページを通じて積極的に動物等の成長を発信した。 （C）基礎的な知識・技術を確実に習得させた上で、農業クラブ活動を実践し、専門教育の理解を深めた。農業クラブ活動では意見発表において東京都最優秀賞、関東大会優秀賞を受賞した。 （D）在学中に日本農業技術検定を全員受験させ、今年度は３級 29 名、２級 10 名のほか、１級にも１名が合格した。さらに小型車両系建設機械講習は 14 名が修了した。アグリマイスタープラチナ１名。
（ウ）園芸科学科	**（ア）学科における学習指導・生活指導・進路指導などの取組**
	（学習指導）野帳と手書きのレポートに加えて Teams を併用して学習意欲を維持しつつ、授業・レポートの指導等をとおして基礎学力の定着を図った。 （生活指導）すべての授業で、挨拶、遅刻、頭髪、身だしなみの指導を徹底した。また、食料や生活を育む植物を扱う者として自他の生命を尊重し、自然に感謝と愛する豊かな心の育成につなげることができた。 （進路指導）専門教育やインターンシップを通して、自己の在り方や生き方を考えさせ、望ましい勤労観と職業観を育てた。また、学科の教員による面接指導及び小論文指導を行い、組織的な進路指導を実施した。 （地域連携）地域企業と連携の取組として、酒造会社や観光牧場に生産物を提供し、企業からは廃棄物の提供を受け、循環型農業に取り組んだ。植物の栽培から加工までの流れを体系的に学ぶことができた。 （特色化）ＧＡＰ教育の推進に努め、メロンに加えてブルーベリーでの認証取得に向けた取組を開始した。 （資格取得）資格取得やインターンシップを勧め、農業関連分野への意欲・関心を高めた。また、進路指導部や学年と連携して３年生の進路活動を支援した。

	（イ）目標達成のための実践結果
	（A）基礎学力向上を目標として、各科目で文章表現と計算を意識的に取り入れた。また、実験や実習を重んじ、科学的な思考や倫理観を高めた。特にレポート採点指導を強化することにより、論理的な文章が書けるように指導を行った。 （B）座学や実習等を通して、自然と人間生活の関わりを深く理解する機会を積極的に設けるとともに、ＧＡＰに関する指導を強化することで、農場及び実験・実習施設の清掃指導を徹底し、清潔で安らぎのある学習環境と生活環境を整えた。 （C）８～10 月に造園・農業分野のインターンシップに 18 名が参加した。３年生の進路指導は科内で分担して個別に面接・論文指導を実施した。学科の特色を生かした「箱根ヶ崎駅花壇の装飾」や地域行事への参加をとおして、奉仕の心の育成と社会に尽くす態度を育むことができた。 （D）３年「野菜」で栽培した水耕メロンをＧＡＰ教育の題材として取り組み、生徒の理解が深まった。 （E）日本農業技術検定は３級 23 名、２級１名が合格、刈払機講習 12 名、小型車両建機講習９名が修了した。
（エ）食品科	**（ア）学科における学習指導・生活指導・進路指導などの取組**
	（学習指導）座学では意義や役割と理論を学び、実習では総合的な体験及び検証を行い、食品に関する基礎的・基本的知識と技術を習得の向上につなげた。畜産科学科の生乳や豚枝肉を利用した牛乳製造実習やソーセージ製造実習を実施した。 （生活指導）豊かな人間性育成のため、実験実習を通して基本的な生活習慣の確立を図った。また、すべての授業において、挨拶、遅刻、頭髪、身だしなみの指導を徹底した。 （進路指導）学科の教員による面接指導、小論文指導を丁寧に行い組織的な進路指導を実施した。 （地域連携）地域の行事への参加を再開し、「ジャム」・「七色とうがらし」・「クッキー」を販売した。七味唐辛子は瑞穂町のふるさと納税返礼品として提供もした。 （特色化）　多岐にわたる製造項目を実習授業において学習し、専門性を生かした地域の特産品の開発に取り組み、専門教育の向上と充実を図った。 （資格取得）食品衛生責任者 21 名。日本農業技術検定合格者は３級 12 名、２級２名と振るわなかった。将来役に立つ食品に関する資格取得を目的とした授業をカリキュラムに取り入れ、受験者の８割以上が合格できるよう指導を行う。
	（イ）目標達成のための実践結果
	（A）実験実習を通して専門的知識と先端技術への理解を深めさせた。学習では常に記録と整理を行い、活用する習慣を身に付けさせた。また、レポート等の提出期限を守るよう指導の徹底を図った。 （B）実験・実習の授業をとおして、安全に配慮し、協力と責任を重んずる態度とそれを実践する力を養った。また、生活規律の指導として欠席、遅刻、早退、忘れ物等の指導を徹底した。特に食品衛生に留意し、服装、頭髪、化粧、爪、装飾品、手洗いなどの管理を徹底した。 （C）特別専門講師による和菓子及び高度な洋菓子製造実習のほか、ものづくりマイスターによる製パン実習を実施し、食品のスペシャリストとしての職業観を養うことができた。 （D）地域を対象とした公開講座を実施した。
（オ）生活デザイン科	**（ア）学科における学習指導・生活指導・進路指導などの取組**
	（学習指導）生活に関する基礎的な知識・技術を実験・講義・実習を通して幅広く身に付けさせた。進路実現に必要な学力を育成する。 （生活指導）すべての授業において、挨拶、遅刻、頭髪、身だしなみの指導を徹底した。点呼の際には持ち物、服装点検等を徹底した。その取り組みにより、社会ルールやモラルについて理解を深めるとともに、他者への思いやりの気持ちを育んだ。 （進路指導）科目「生活産業基礎」におけるキャリア教育のほか、学科の教員による面接指導と小論文指導を丁寧に行い、組織的な進路指導を実施した。 （地域連携）保育園実習と近隣資料館見学のほか、有志による地域でのボランティア活動を再開し、地元との連携を充実させるとともに、生徒の勤労観を育んだ。 （特色化）　ＳＤＧｓ教育の一環として 17 項目の内容を学び、授業実践することができた。 （資格取得）将来役に立つ家庭生活や福祉に関する資格取得を目的とした授業を、カリキュラムに取り入れ指導を行った。
	（イ）目標達成のための実践結果
	（A）放課後の補習や長期休業中の実習等・反復指導を行い、生徒一人一人の学習状況に対応した指導を実施して生徒の学力向上と基本的な技術の定着を図った。 （B）実習室の整理、清掃を徹底し、学習環境の整備を行った。 （C）積極的に実験･実習に取り組ませ、実習後のレポート提出や発表を行うことにより表現力を身に付けさせた。 （D）規範意識の向上として、挨拶の励行、高校生として相応しい身だしなみ指導を徹底した。また、その場に応じた言葉づかいができるように日頃から指導を繰り返した。 （E）進学希望者（推薦やＡＯ入試）に対する面接対策指導、作文・論文対策指導などを組織的に実施した。 （F）実施可能な各種検定に挑戦させるための指導を行った。 ・家庭科技術検定３級：被服８名、食物 17 名、保育 11 名、２級は保育３名が合格。 ・ビジネス文書実務検定：３級 38 名、２級４名が合格。

・保育福祉類型選択者３学年は、手話検定４級は 14 名が合格した。
（G）赤い羽根共同募金や地元自治体と連携したボランティア活動に取り組ませた。

（２）教育活動の具体的内容と結果

①学習指導

（ア）授業力向上、授業改善、ＳＤＧｓ、ＡＬ・ＵＤＬの視点を取り入れた授業の実施

若手教員を中心に研究授業を 36 回実施し、相互の授業観察を全教員が２回以上実施した。10 回の合同研究協議により授業力向上および授業改善のため、個々のスキルアップとともに学校全体で課題を共有することができた。

全教科の教員がＳＤＧｓを意識した授業展開を取り入れ、教科横断的な学習に取り組み、生徒の意欲向上が図られた。授業評価アンケートからは明確には測れないが、授業担当者の評価として生徒の学習意欲向上の様子が伺えた。

ＡＬを専門学科だけで留めず各教科で実施した。研究授業・研究協議でもＡＬの取り入れ方について議論が深められ、授業の改善につなげられた。またＵＤＬを意識した教材作成、板書やスライド作成が複数の教科・学科で進み、一般的なものとなりつつある。

（イ）授業外の学習（補修・講習、プロジェクト・家庭学習）・資格取得の奨励、反復学習の実施

学力向上研究校の指定を受け、校内寺子屋を33日間実施し、延べ357人の生徒が参加した。学力向上が明確に現れることはなかったが、生徒の学習環境を整え、学習習慣の定着には一定の成果があった。このほか、ほぼ毎日専門学科の補修が行われ、これによって一部の生徒は作品が完成し達成感が得られ、一部の生徒は進級するに至った。一方で夏季休業中の講習参加が少なく、講習内容の設定と周知方法の課題が明らかになった。

資格取得の結果は次のとおり。

食品衛生責任者18、刈払機取扱作業者12、介護職員初任者研修11、被服製作技術検定（３級８、４級42）、食物調理技術検定（３級17、４級54）、保育技術検定（２級３、３級11、４級50）、ビジネス文書実務検定（２級４、３級38）、小型車両系建設機械（３ｔ未満23）、手話検定（４級14）、ＩＣＴプロフィシエンシー検定（３級10）、日本農業技術検定（１級１、２級13、３級64）、アグリマイスター（プラチナ２、ゴールド３、シルバー10）、漢字能力検定（２級４、準２級３、３級３）、実用英語能力検定（２級１、準２級２、３級４）

（ウ）言語能力の充実、コンクールへの参加

言語能力の充実に向けて各教科ではＡＬの１つとして取り組んだ。専門学科の課題研究や作品制作にかかわる授業では、必ず全生徒が発表に取り組むとともに、放課後や長期休業中を中心にレポート作成の個別指導に各学科で取り組んだ。これらの取り組みから提出物の提出状況が改善されるとともに、表現が豊かになる生徒も現れた。

特に農業クラブの意見発表会や学習成果発表会では近隣中学生を招き、代表生徒を中心に、分かりやすいプレゼンテーションの作り方と発表方法について、身に付けた。中学校からも非常に高い評価を得られた。

コンクールの参加状況は次のとおり。

東京都産業教育振興会作文コンクール（最優秀賞１、佳作３）、瑞穂町青少年の主張意見発表会（優秀賞２、佳作３）、図書館で調べる学習コンクール（瑞穂町最優秀賞及び全国佳作１、同優秀賞５、同佳作１）

（エ）高大・地域連携、その他

以下の高大連携と地域連携に取り組み、最新の知識や技術に触れるとともに、専門学科の学習内容対する意欲・関心を高め、希望する進路の実現に向けた学習にすることができた。

＜高大連携＞

①日本獣医生命科学大学　大学レベル講義（畜産科学科２年酪農類型　通年）
②東京農工大学との連携　豚の飼料に関する共同研究（２年目）と国際学会でのポスター発表（養豚類型生徒）
大学施設の見学
③東京農業大学　教授による講演会（園芸科学科）

＜地域連携・企業連携＞

①石畑保育園　生活デザイン科（保育福祉類型3年）5月、7月保育実習を実施。
生活デザイン科（保育福祉類型2，3年）10月に発表会実施を実施
②みずほひじり保育園　生活デザイン科（保育福祉類型2年）10月に発表会を実施
③国立市立小中学校　畜産科学科の豚肉を使った給食と小学生との交流
④三鷹市立第三小学校　５年生向けに生徒による酪農に関する授業の実施
⑤青梅畜産センター　畜産科学科（酪農類型）ホルスタイン種の採卵に関する試験と受精卵移植の講習会
⑥青梅畜産センター　畜産科学科（酪農類型）飼料添加剤による暑熱ストレスの変化に関する試験
⑦都内の食品会社（大多摩ハム・清水牧場・石川酒造）　畜産科学科の生産品を使用した農産物の生産とその販売
⑧都内のシイタケ栽培農家　畜産科学科（養豚類型）廃菌床等の有効活用
⑨日本養豚協会　畜産科学科（養豚類型）登録審査員による子豚登記および種豚登録に関する講習会
⑩公益社団法人国際農業者交流協会主催「畜産ティーン育成プロジェクト」へ２名参加（畜産科学科）
⑪瑞穂町内の花卉農家（原園芸）　講演会（園芸科学科）
⑫航空自衛隊横田基地　「ご当地空上げ」商品開発（食品科）
⑬瑞穂町農畜産物直売所　食品科学科　季節ごとの「おやき」商品開発
⑭千葉県の養豚場、都内養鶏場の方による講演会（畜産科学科）
⑮JA全農・キーパーソン21主催「酪農の夢」出張授業わくわくプロジェクト実施（畜産科学科）
⑯不老乃郷（老人福祉施設）　生活デザイン科（保育福祉類型2年）6月、9月、10月にハンドベル発表会と交流会

②生活指導	**（ア）基本的生活習慣の確立、規範意識（学校生活の規律を大切にする態度）、マナーの醸成に向けた全教職員による年間を通じた継続または指導機関の指導（登校、授業、集会、ＨＲ、職員室入室時など）**
	月５回の遅刻を基準とした生活指導部による集団指導と学年を中心とした個別指導により、遅刻指導を徹底した。今年度の傾向は、生活リズムを崩れや心身の不調を抱えるなどの事情も見受けられた。中でも３学年の遅刻指導対象の生徒が多いことや毎月指導の対象になること生徒がいること、長期にわたり指導を継続する生徒や生活習慣の改善が見られず複数回指導を行った。入学以来、基本的生活習慣が確立しない生徒も一定数在籍していることから、結果として総遅刻回数が昨年度とほぼ同様であった。 「授業心得」を各教室掲示し、受講姿勢・態度について明文化して指導に取り組んだ。またチャイムと同時に授業開始することを徹底した。多くの生徒は授業前に教科書等の準備を行い、チャイムスタートの定着が図られている。規定どおりの学校生活について、大多数の生徒が守ることができているが、休業期間中に若干の生徒が染髪をしてしまう現状がある。学年、学科、生活指導部と連携して改善指導をしているが、学年進行ごとに染色する生徒が多くなる傾向がある。 今年度途中から、保護者の理解と協力を得られるように、保護者への連絡回数を増やし、些細なことから連絡するように取り組んだ。次年度以降もこの取り組みを継続し、粘り強く指導に取り組む必要がある。
	（イ）自他の生命・人権尊重の精神（他者を尊重し、思いやりの心を大切にする）に向けた指導
	薬物乱用防止教室やセーフティ教室を通して、自他の生命や人権を尊重する指導を推進した。また交通安全教育を通じて、登下校時のマナーと自転車事故防止の徹底を図るとともに、命の大切さについて理解を深める指導を行った。いじめ対策として、年３回のアンケート調査を行い生徒把握に努めた。１学年では、４月にＳＮＳの使い方講習を兼ねていじめ未然防止学習会を実施した。また、スクールカウンセラーを活用して早期発見に努め、生徒の悩みに対応することで、いじめの未然防止に取り組んだ。 毎週火曜日にスクールカウンセラーを活用した特別支援委員会を開催し、支援の必要な生徒の情報を教員間で共有し、支援を充実させ、いじめ防止の取り組みや自殺防止対策に資する教育の推進を図った。 12月にデートＤＶ防止プログラムによる「他人とのかかわり方」について学ぶ保健講話を、１学年対象に実施した。生徒が興味を持ちやすいテーマで境界の実験など生徒参加型の内容でわかりやすく、自分も相手も大切にする関係について生徒自身が考えるきっかけとなった。 結果として暴力以外のいじめの認定はなく、生命に関わる事故を未然に防いだケースが複数あった。
	（ウ）危機を察知し回避する能力の育成に向けた安全指導と注意喚起（全職員）
	防災訓練を４回実施し、特に３月は学校が土砂災害警戒区域内にあることを踏まえた避難方法を学んだ。１学年が立川防災館で防災学習に取り組み、被災時の心得、自助・共助のあり方等多岐にわたって学ぶことができた。 瑞穂町の防災訓練の実施方法が今年度から変更されたため、次年度以降は地域と連携した防災教育の改善を図る。
	（エ）学習環境の整備
	毎週火曜日の特別支援委員会では全学年の教員と保健部とスクールカウンセラーが参加して生徒の情報を共有し、これを適宜企画調整会議をはじめとした諸会議で共有している。生徒理解に基づき、安全で安心できる学習環境の整備のため、放課後の相談はスクールカウンセラーだけでなく、学年や生活指導部、部活動顧問等が対応することができた。
	（オ）情報発信への取組
	Teamsを通じて基本的生活習慣の確立のため、生徒へ情報発信した。また部活動の取組や行事の取組についても発信回数を増やしたが、保護者や生徒の求める情報と一致していない可能性が学校評価アンケートから推測できることから、生活指導部や部活動からteamsやXでの情報発信だけでなく、classiを通じて保護者に直接情報を発信する内容と回数を改善する必要がある。
③進路指導	**（ア）生徒の能力向上と生徒理解（興味・関心、能力・適性）に基づく進路指導**
	令和６年度３年生の進路決定状況は次の表のとおりである。進学者が約75％（Ｒ５は70％）、就職者が約16％（Ｒ５は公務員等を含み２4％）となった。令和５年度卒業生と比較すると、進学者が増加、就職者が減少した。進学者の内訳は、大学・短大が進学者のうち約45％（Ｒ５は31％）、専門学校が５1％（Ｒ５は56％）となっている。コロナ禍以降、就職者が減少し進学者が増加、かつ進学者のうち大学・短大進学者の割合が増加し、大学・短大進学者数と専門学校進学者数が拮抗する傾向にある。昨年度は大学・短大進学者がやや減少したが、今年度は再びコロナ禍以降の傾向を示したので、この傾向は今後も続くのではないかと考えられる。また、進路決定者のうち、「その他の進路」決定者12名の内訳は、海外大学進学予定1名、語学留学1名のほかに芸能活動、宗教活動、アルバイト（進学資金準備など）などである。例年と比較して、生徒がより多様な進路を選択したが、この傾向は今後も続くことが予想される。 大学進学者の内訳は、農業系大学（５年度15名→６年度24名）、家庭系大学・短大（５年度９名→６年度10名）。また主な農業系大学進学先は、帯広畜産大学１名、東京農業大学９名、日本獣医生命科学大学４名、北里大学２名、麻布大学５名、東海大学１名などである。主な家庭系大学短大は、白梅学園大学２名、秋草短期大学４名、新渡戸文化短期大学２名などである。またその他の大学は、駿河台大学、拓殖大学、埼玉学園大学等に、一般受験では国士舘大学、法政大学（通信教育部）等に合格した。これらは１年次からの意識付け、学年、進路部、学科が連携した指導と、学力向上研究校（校内寺子屋）事業を生かした生徒の能力向上と生徒理解の取り組みの成果といえる。今後も引き続

	き、大学進学希望者に対応した取り組みとして、基礎学力向上のための講習や資格取得、専門教科学習の充実と併せて、３年間を見通した計画に沿って、キャリア教育の充実を図っていく必要がある。 ３年就職希望者に対しては、進路指導部が中心となって、面接、作文指導や礼節指導等を実施した。今年度は民間ＯＢ活用事業の指定を受け、外部の人材を活用してカウンセリングや面接指導を中心に充実を図った。挨拶や敬語、きちんとした身だしなみの習慣は全校で指導に取り組んだ。今後も１年次より継続的に学習に取り組ませていく環境づくりが必要である。 今年度も志望が大きく変わる生徒が複数名おり、その対応に苦慮した。このような生徒も含めて希望を叶えることが重要であるが、受験指導、就職指導をより計画的に行うことと同時に、早期から保護者との連携を充実させることが重要である。今後も進路指導部を中心に学年や教科との連携を図り、昨年度より導入したスタディサプリを活用し、より組織的、具体的に進路実現を図れる環境を醸成する。
	（イ）３年間を見通した計画的なキャリア教育
	３年間を見通した進路指導のロードマップを活用し、微調整を図りながら進路指導を行った。また、あらゆる教育活動においてキャリア教育を推進し、自己の在り方生き方を考えさせ、望ましい勤労観・職業観を育み主体的な進路選択を行える生徒の育成に役立てた。今後も進路指導部と学年が連携を図り、すべての生徒の希望する進路の実現を目指す。
	（ウ）ＩＣＴ機器などを活用した履歴の記録
	学年、教務部、進路指導部および実業部が連携し、学習記録に加えて、特別活動、資格取得等の統合型校務支援システムへの集約に取り組んだ。
	（エ）点検機能の充実
	組織的な点検機能（学年⇒進路指導部⇒管理職）を充実させ、進路に関する関係書類等の転記ミスをゼロとすることができた。
④特別活動・部活動	**（ア）学校行事、ホームルーム活動、生徒会活動、委員会活動、部活動への積極的参加**
	今年度は体育祭で種目の変更、文化祭では来場者の事前登録等の改善を行った。どちらも運営は円滑に進み、保護者と生徒の反応は非常に良いものであった。学校行事に伴う各委員会活動、ホームルーム活動の充実が図られ、学校評価アンケートでの生徒の評価は高い。部活動の加入率は５月の調査で７２％を達成した。その後学校生活になじんだ複数の１年生が後から入部することもあった。
	（イ）部活動の充実、競技力の向上による達成感、成就感の獲得
	諸事業を活用して９部で１２人の指導員を任用し、活動の充実と技術向上を図った。大会の成績に反映されないこともあるが、生徒の意欲向上に大きく寄与している様子が伺える。また大会参加や地域行事への参加を通じて生徒の充実感や成就感が向上している様子は、学校ホームページやＸ等インターネットを通じて公開した。
	（ウ）部長会、生徒会、委員会、農業クラブ、家庭クラブ組織を活用した自主性、社会性、協調性の涵養
	今年度は生徒の自主性を尊重した指導に取り組み、部長会や生徒会の活動も可能な限り生徒主体で運営できるように指導した。結果として運営に課題もあったが、次年度の改善に向けて新体制で取り組み始めている。社会性や協調性の涵養を図るため、生活指導部を中心とした組織的な指導・支援体制の構築を次年度の課題として取り組む。 また今年度も農業クラブや家庭クラブの活動等への積極的な参加を通して、学習活動に意欲をもたせた。 農業クラブ活動においては、プロジェクト発表の分野Ⅰ類とⅢ類で東京都大会優秀賞、同Ⅲ類で東京都大会最優秀賞と関東大会優秀賞を、意見発表では分野Ⅱ類で東京都大会優秀賞、同Ⅰ類とⅢ類で東京都大会最優秀賞、関東大会優秀賞を、家畜審査競技会（乳牛の部）では10名が東京都大会優秀賞を、また農業鑑定競技（野菜分野）では全国大会優秀賞をそれぞれ受賞した。 家庭クラブでは、ボランティア活動を継続し、最寄り駅で行う募金活動に２回協力した。 いずれも自主性、社会性、協調性の涵養が図られており、次年度も継続させるとともに、学校生活のさらなる充実に向けて取り組ませたい。
⑤募集・広報	**（ア）ホームページ、Ｘなど、学校パンフレットの充実、学校説明会、体験入学、学校・塾訪問、出前授業により学校の取り組みに関する積極的な情報発信、安定した入学者選抜応募倍率**
	ホームページ、Ｘ、インスタグラムの更新回数はそれぞれ175、88、68であった。ホームページの更新回数は昨年度より減ったが、部活動や生徒の学習活動の広報は増えており、月平均の閲覧回数は約12000件であった。 学校パンフレットを改定するとともに、複数の配布しやすい形態の資料も作成した。 募集活動は、校内では学校見学会４、瑞高ツアー６、体験入学２、学校説明会２を実施し、校外の説明会は15に参加、中学校での出前授業や説明会へは９校に参加した。募集倍率が改善し、農業科は学力一次選抜でも1.32倍に達した。家庭科では学力一次選抜で0.96倍とわずかに１倍に届かず、次年度はより効果的な発信方法に改善する必要がある。
	（イ）募集活動の組織的・計画的な推進、全職員が取り組む体制、募集活動の充実
	総務部を中心に全職員により、説明会、中学校訪問、および塾訪問に取り組んだ。中学校は100校以上、塾へは70件程度に訪問し、直接学校の状況を説明し、本校の認知度を高めることができた。
	（ウ）地場産業界・自治体との連携や公開講座など、地域連携活動の推進
	①（エ）に記載のようにに取り組んだほか、以下の活動に取り組んだ。

	①残堀川ふれあいイベント　５月のイベントで実習生産品の販売（園・畜・食） ②イオンモール夏祭り　８月のイベントで実習生産品の販売（食） ③瑞穂町こどもフェスティバル　１０月に出展し食育に関するパネル発表、ヤギのふれあい体験 ④瑞穂町産業まつり　１１月に実習生産品の販売（園・畜・食）、 吹奏楽部・軽音楽部・ダンス部が参加・発表 ⑤みずほ園　１２月に実習生産品の販売（食）、３月に和太鼓部の演奏
	（エ）校内掲示の充実、本校の教育の来校者への理解促進
	部活動や生徒会活動、資格取得の取り組みを中心に受付や生徒昇降口周辺に掲示した。
⑥健康促進	**（ア）生徒状況の把握と病気・ケガへの迅速な対応、外部講師・掲示を活用した保険教育**
	３月の入学説明会後から本人・保護者からの聞き取りを開始し、配慮の必要な生徒一覧を作成した。職員会議等での周知により生徒の健康管理について共通理解を図ることができた。また定期健康診断を４月初旬に実施し、未受診者のフォローを行い受診率が向上した。実施後は事後措置を速やかに行い、生徒が自己の健康に関心がもてるように結果通知、保健だよりを発行した。 ５月には教員を対象にエピペントレーナーを使用したアレルギー対応講習を実施し、救急体制の確認をした。 ６月に１学年対象に熱中症予防セミナーを実施した。生徒は熱中症の理解を深め、予防に取り組むことができた。 ７月に東京都の専門医派遣事業を活用して、産婦人科医による「知ってそうで知らないこと」講演会を、１学年で実施した。「とても良かった。良かった」と答えた生徒が82%で、興味関心を持って講演会に参加できていた。 保健室は年間約1200件の記録に残る来室があり、全校生徒の67.2%の利用があった。年間40回以上と頻回利用する生徒もいた。 産婦人科校医が毎月１回来校し、対面の個別相談を35件実施した。生理痛などの悩みを医師に直接相談でき、症状の改善、受診や治療につながった。
	（イ）清掃用具などの整備、清掃指導、美化活動、環境教育の充実による教育環境の整備と生徒の健康安全
	校内の清掃用具の点検・整備を進め、体育館を中心に清掃用具ロッカーの交換を行った。美化委員会で週１回と大掃除などのゴミ出し当番を実施した。美化週間を設け、きれいなクラスを表彰した。委員の美化意識は高まった。原則として生徒のゴミ持ち帰りのため、校内はとてもきれいな状態で、出されるゴミの量は少なかった。来年度については検討中である。またトイレの内装が暗く、修繕が進んでいない個所もあり、改修の要望が保護者からも出ており、次年度以降の課題である。
	（ウ）合理的配慮の把握と支援方法の工夫、ＳＣ・外部機関との連携、教職員との共通理解促進
	原則として毎週特別支援委員会を開催し、ＳＣとの連携をより一層緊密にすることで、生徒へのきめ細かな対応を心がけた。必要に応じて関係の子ども家庭支援センターや児童相談所とも連携し、担任だけが対応することなく、管理職、保健部、ＳＣ、外部機関の連携を図るとともに、諸会議で必要な共通理解を図った。 巡回心理士の活用による発達検査を１名に実施し、保護者を交えて検査結果を共有し、必要な配慮と保護者と学校の役割分担等について共通理解を得られた。今年度はコミュニケーションアシスト講座の利用者はいなかった。
	（エ）「TOKYOACTIVE PLAN for students」を参考にした生徒の体力向上への取組
	全学年において体力テストの意義や目的を理解させ、５月に実施した。体育の授業では体を動かす楽しさを体感すべく、幅広いスポーツを扱い、生涯スポーツと体力向上の意義について理解を進めることができた。
⑦学校経営	**（ア）ＯＪＴ・ＯｆｆＪＴ、自己研鑽、保護者・同窓会との連携強化**
	常にチームとして学校が機能するように、副校長と主幹教諭を中心に諸会議で方向性を確認しながら、諸業務に取り組んだ。 また、学校運営連絡協議会が実施する学校評価アンケート及び生徒の授業評価アンケート、さらに保護者意見の結果から分析や検討を継続的に行い、意見や提言を真摯に受け止め学校経営に反映させた。
	（イ）経営企画室・教員の連携、計画・効率的な予算執行、施設・設備の点検・共有化と整備・改修
	企画調整会議を基盤に据え、経営課題の解決と経営方針の徹底を図ることで迅速かつ組織的な対応力を高めた。また、各分掌はＰＤＣＡ一覧表を作成して、学校経営計画の実現を図るための進行管理に活用した。 経営企画室は予算の適正執行を行い、センター執行率も上昇した。
	（ウ）業務把握・削減・分担、意識改革、明るい職場
	職員会議と一部会議のペーパーレス化に取り組み、印刷と付随する業務を縮減した。長期休業中は役割分担を明確にしつつ、teamsと共有サーバでの情報共有化を進め、介護や育児等を理由とするテレワーク利用者は６名であった。校内研修を通じて、管理職から校内の風通りの良さが重要であることを説き、職員間または職員と管理職寛の情報共有が進むとともに、各種事故の未然防止が図られた。
	（エ）計画・継続的研修、教職員のコンプライアンス意識の醸成、組織的点検の実施
	月初めと週末のクリーンデスクに努め、保有個人情報の管理徹底を図った。また、個人情報を含む資料については、各担当者に確認を行ったうえで書類などを手渡した。 入学者選抜業務については、採点基準を明確に定め、採点においては複数による複数回の点検を順守した。また、西部学校経営支援センターと緊密に連携に行い、情報を共有化して学校経営の適正化と効率化を推進し、経営基盤を強化した。服務事故０を目指し、研修を３回実施するとともに教職員一人一人は意識向上に努めた。 次年度は各種会議回数を調整して校内研修の時間を確保し、さらなる充実を図る。

⑧地域貢献活動	**（ア）地域産業界・自治体・他校種との連携**
	教科「人間と社会」や各学科の専門科目を通して、地域貢献活動を実践した。①（エ）や⑤（ウ）のほか、人間と社会で次のとおりに取り組んだ。 講演会（講師：六道山レンジャー）、外来種引き抜き体験、学ぶことの意義（教育実習生の話）、ネット時代(SNSの関連)、パラスポーツ（車いすバスケット）体験、自然と人間のかかわり(稲刈り体験)、外来種引き抜き体験、瑞穂町駅伝大会ボランティア体験 瑞穂町立瑞穂第一小学校　　２年生生活科の町探検の取組に畜産科学科と園芸科学科の内容を説明
	（イ）地域行事への参加、ボランティア・町内装飾活動
	上記「人間と社会」での取り組みのほか、春と秋に園芸科学科３年草花選択者によるＪＲ箱根ヶ崎駅前花壇の整備、10月と12月に生活デザイン科・家庭クラブによる箱根ヶ崎駅での募金活動を行った。また「人間と社会」の取組みの一環として学校から箱根ヶ崎駅間の清掃活動を行った。 学校が地域に期待されていることは全職員の理解するところであり、今後も引き続き生徒の学習活動が地域に喜ばれ、生徒が達成感や有用感を得られるように教育活動を継続する。

（２）数値目標と結果

①過去５年間の数値結果

項目		目標内容	Ｒ２	Ｒ３	Ｒ４	Ｒ５	Ｒ６
学習活動	ア	生徒の授業満足度を向上させる	83.0%	90.6%	90.6%	86.5%	88.5%
	イ	原級留置者を各学年ともに低減維持する	0.0%	0.2%	0.2%	0.2%	0.9%
	ウ	各種資格・検定合格者	455 名	522 名	522 名	650 名	425 名
生活指導	エ	１日１クラスあたりの遅刻者数	0.40 人	0.06 人	0.06 人	1.25 人	1.27 人
	オ	年間の遅刻 30 回以上の生徒の減少	4 人	10 人	10 人	34 人	34
	カ	中途退学率を低減維持する	0.38%	0.96%	0%	0.2%	0.4%
進路指導	ケ	生徒の進路指導満足度	75%	85.5%	85.5%	86.0%	86.4%
	コ	卒業時の進路未決定者の低減を図る アルバイト・進学準備・その他	4%	5.9%	5.9%	0.6%	8.7%
原級留置者数	サ	原級留置者数	0	1	1	1	1
中途退学者数	シ	中途退学者数	2	5	0	1	2
募集活動	ス	生徒・教員による中学校・塾等訪問数	0 校	0 校	267 校	105 校	170 校
	セ	学校説明会、体験入学の参加者数 （生徒数）	496 人	645 人	793 人	1040 人	1026 人
	ソ	ホームページの訪問件数（件） Ｘのポスト数（件）	178,553 227	60,597 226	60,597 226	355,214 188	382,586 88
	ナ	各学科の第一次募集平均倍率	1.3 倍	0.86 倍	1.02 倍	0.83 倍	1.14 倍

②卒業生の進路状況

区分		Ｒ２年度			Ｒ３年度			Ｒ４年度			Ｒ５年度			Ｒ６年度		
		男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計	男子	女子	計
進学	大　学	14	29	43	13	41	54	10	32	42	12	22	34	12	27	39
	短　大	0	11	11	0	21	21	0	22	22	0	12	12	1	7	8
	専門学校	10	58	68	7	40	47	14	38	52	11	54	65	15	38	53
	大学校	2	4	6	3	2	5	5	1	6	4	2	6	4	0	4
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
就職	学校斡旋	8	19	27	11	14	25	10	16	26	11	26	37	5	17	22
	縁　故	2	3	5	0	1	1	1	1	2	1	1	2	0	0	0
	公務員	0	0	0	0	4	4	0	0	0	0	1	1	0	0	0
	自営・家事	0	1	1	0	0	0	0	2	2	0	1	1	0	0	0
	アルバイト	0	6	6	0	2	0	0	4	4	0	0	0	0	1	1
未定	進学準備	1	1	2	0	0	0	0	2	2	1	1	2	0	1	1
	就職準備	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	1	3	4
	その他	0	3	3	0	9	9	0	0	0	1	3	4	3	3	6
	合　計	36	135	172	34	134	168	40	118	158	41	126	167	41	97	138

③入学選抜

受検形態	学科	H28	H29	H30	H31	R2	R3	R4	R5	R6	R7
推薦入試倍率	園芸科学科	1.8	1.4	3.2	3.1	1.8	2.90	1.2	1.1	1.4	1.5

	畜産科学科	4.8	3.0	4.0	3.7	3.5	4.00	4.3	3.7	2.1	3.9
	食品科	2.5	1.8	3.1	2.4	2.0	2.80	2.2	1.7	1.9	1.4
	生活デザイン科	2.1	2.50	2.57	2.43	2.24	2.14	1.47	2.24	1.48	2.33
学力選抜倍率	園芸科学科	1.04	0.72	1.48	1.32	0.96	1.28	0.53	0.8	0.92	1.12
	畜産科学科	2.04	1.16	1.88	1.68	1.32	1.48	1.88	1.6	0.96	1.80
	食品科	0.96	1.08	1.36	1.20	0.96	1.29	0.84	0.68	0.92	1.04
	生活デザイン科	1.04	1.39	1.16	0.98	1.02	1.00	0.53	1.02	0.67	0.96

3　次年度以降への課題と対応策			
	重点項目	成果と課題	改善策
（1）	本校最大の使命 生活規律	【成果】学習指導での基礎・基本の定着と、中途退学者の減少の基盤となるきめ細かな生活指導の充実を図った。 【課題】基本的生活習慣と学習習慣の確立。通信機器の活用方法の確立。組織的・段階的な遅刻指導。	①教員巡回、昇降口立ち番の継続。 ②段階的な遅刻指導の実施。 ③生活指導部を中心に学校全体での身だしなみ指導の徹底。 ④自転車安全指導の充実。 ⑤組織的な校内外巡回の実施 ⑥チャイム着席と授業規律の徹底。 ⑦校内寺子屋事業の活性化 ⑧特別支援委員会とカウンセリングの充実
（2）	基礎学力の向上	【成果】各教科で教科会や教科主任会議を中心とした基礎学力向上の取組を実施するとともに、校内寺子屋事業を活用し、学習習慣の定着が進んだ。 【課題】各教科統一の授業規律指導の徹底。学習習慣の確立（家庭学習時間の確保）。	①各教科は、生徒実態調査の分析により、家庭学習時間確保に向けた課題を工夫する。また、学年や分掌での中途退学者の抑止を、今後とも組織的に体制を整え継続して実現する。 ②小テストや宿題を定着させ、評価に加える。 ③教務部を中心に主要３教科の教科主任と共に校内寺子屋事業の活用を促進する。
（3）	指定校等の取組	【成果】学力向上推進校（校内寺子屋事業）として、教務部は外部講師による教科指導を実施した。各定期考査の２週間前から実施し、40回の参加人数は56名、延べ人数280名であった。 【課題】事前・事後指導の工夫と改善。予算面の管理。指定校への申請。	①学力向上推進校では、到達度テストを参考に国語・数学・英語の教科主任との教科会を開き、学力向上に向けた情報共有と校内体制の構築を図る。 ②校内寺子屋を活用すべき生徒の成績について、教務部が中心となり分析に努める。 ③外部人材の活用が不可能な場合、学習習慣定着のため環境整備が課題であり、校内組織を整えて、生徒の基礎学力向上のために取り組める体制をとることを検討中である。
（4）	進路指導の充実	【成果】３年間を見通した進路指導のロードマップに基づき、計画的な進路指導を取り組むことができた。 【課題】出口指導の強化が必要である。次年度は計画的かつ早期からの面接指導の在り方を実施する。キャリア教育の情報を保護者へ効果的に展開させる必要がある。	①前倒しの面接指導（４月から実施）、小論文指導（国語科との連携）。 ②月間進路だよりの発行（teamsでの周知）。 ③キャリア教育の情報の保護者への効果的な周知（東京都版classiの活用）。 ④学力向上（校内寺子屋等）の対応と分析。 ⑤卒業生の追跡調査（学校ホームページへのコメント依頼等）。 ⑥全学年会への参加（ホームルール年間指導計画の運営連携）。 ⑦推薦を活用する生徒の指導と保護者理解。
（5）	防災教育の充実	【成果】様々な災害を想定して避難訓練を実施し、避難経路の確認と防災意識の向上が図られた。 【課題】自然災害への危機意識の醸成に向けた訓練の在り方について工夫する。地域（役場・消防団）、消防署、自衛隊との連携の充実。	①防災教育のさらなる充実を図り、地域連携の強化と避難所を想定した生徒主体の訓練を行うなど、地域の特性を生かしながら本校独自の取組を実践する。

（６）	安心できる安全な学校	【成果】学年主任の参加する特別支援委員会を毎週実施するとともに、職員の朝会にて生徒の情報共有を図った。教職員は、体罰の根絶を目指した研修会等を各学期実施した。 【課題】情報共有の活用と連携。いじめや暴力のない学校づくりとしての未然防止教育。保護者との情報共有。	①企画調整会議、特別支援相談委員会等を活用し、積極的な情報共有を継続する。各学期に体罰の根絶を目指した研修会等を実施する。 ②いじめ防止対策委員会を機能させ、いじめアンケートや特別支援相談委員会への生徒情報を基に、いじめのない学校づくりを推進する。
（７）	専門分野の知識技術等向上	【成果】技能スタンダードの取組を通して、身に付けるべき専門分野に関する技術・技能内容をさらに明確にし、組織的な取組を継続している。農業技術検定に１級１名、２級13名、３級64名が合格した。 【課題】各種検定に向けた知識技術の向上。指導内容・方法の改善。	①授業では、生徒が技術・技能面での到達度について確認する。到達していない場合は、繰り返し指導する。 ②次年度も「農業技術検定」を受験予定。
（８）	部活動加入率の向上	【成果】部活動加入率を向上させるために、４月に部活動紹介を実施した。部活動掲示板を生徒昇降口付近に新設した。X、ホームページなどからの情報発信を増やした。 【課題】部活動加入継続と加入率向上、部活動の情報発信。決められた活動日及び活動時間の徹底。	①１年のオリエンテーションで部活動紹介を行う。 ②部活動掲示板を継続的に更新する。 ③生徒掲示板の活用とホームページ、X、Teamsなどからの情報発信をさらに充実させる。 ④部活動月間活動報告の在り方を見直す。
（９）	特別支援教育の充実	【成果】毎週の特別支援相談委員会にて生徒の情報共有を図り、スクールカウンセラーや生活指導部と連携して全生徒にきめ細やかに対応するとともに、保護者への情報共有を充実させた。 【課題】教員校内研修と中学校との連携。	①各教科からの情報共有と年度当初に得た情報を集約し、全教員で共有する。 ②必要に応じて「学校生活支援シート」を作成し生徒指導に役立てる。
(10)	人材育成	【成果】①校内ＯＪＴを継続し、生徒理解、授業改善等についての協議会を実施。 ②校内研修に全ての分掌主任が参画するように改善。 【課題】実施時期の工夫。学校の諸課題をテーマに主幹教諭及び主任教諭を中心としたグループによる人材育成。	①ＯＪＴの実施体制については、これまでの反省をもとに、今後も実践的かつ実効的な内容に改善し、全主幹教諭・主任教諭が取り組む体制づくりを継続する。 ②教員相互の授業参観の継続。 ③選考に向けた校内研修の実施。
(11)	募集活動の活性化	【成果】公開講座、中学校での説明会等を再開した。 【課題】①学校ホームページ、X、Instagram等の活用方法を改善する。 ②校内外の説明会への対応を全教職員で取り組む。	①中学校訪問時期の改善と訪問数の設定を行い実施する（３校を目標とする）。各科の説明を丁寧に行う。 ②個々の活動をホームページに掲載して情報発信に努める。 ③中学校教員を対象とした説明会を開始する。 ④学習塾への訪問や情報提供を行う。